

揚子江にそそくクリークにたまった中国人の死体



旧日本軍の残虐行為として「東京裁判」でも裁かれた南京大虐殺事件。戦後三十八年たった現在も「史実だ」「信じまげられた歴史」と論議が絶えないが、旧日本軍輸送部隊員の一人が、事件直後に南京入り、カメラに収めた写真が十五日から東京・渋谷の山手教会で始まった「戦争資料展」で公開された。六枚組で、揚子江沿岸に流れ着いた

南京大虐殺「これが現場だ」

1週間後に撮影 元兵士が公開

大量の死体、それを焼却したあとの現場を見下ろす日本軍の姿などの生々しさが見る人にショックを与えている。

この写真を撮影、保管していたのは、埼玉県川越市仙波町一ノ五、会社経営、村瀬守保さん(68)。村瀬さんは十二年七月に応召、兵站(たん)自動車第十七中隊に配属された。半月後、二等兵として中国大陸に渡ったが、兵器や糧

食、被服などを運搬する輜重(しちゅう)部隊だったため、愛用の小型カメラ三台の携帯を許され、中隊長から戦場の模様と兵隊の日常を記録せよ」と指示されたという。

南京城内で中国人の死体を撮影し、撮影したのは同年十二月下旬。日本軍による南京占領(十二月十三日)の一週間、十日ほどあとのこと。村瀬さんの中隊は南京郊外

に駐屯、米や酒を運ぶため、城内に入った際、残虐行為の跡を撮影したという。

七平氏の「私の中の日本軍」など伝えられる大虐殺事件の存在を否定する意見も根強い。

このほど村瀬さんが戦争体験談を西工団体の機関紙に掲載したことがきっかけで、同関係者から依頼を受け出展した。

村瀬さんは、これまで公開しなかったことについて「当時の狂気をいま理解することは難しく公表する気には